

第8章

ドースト・モハンマド・ハーン・モハンマドザーイー とその生涯

小牧 昌平

要約：

モハンマドザーイー朝の創始者ドースト・モハンマド・ハーン（在位；1826-1839、1843-1863）の生涯についてはいくつかの不明な点があり、明らかにされなければならない問題が少なくない。ドースト・モハンマド・ハーンは今日のアフガニスタンに当たる地域を支配下に入れて単一の中央政権を築き上げた最初の人物である。彼が近代アフガニスタン国家の基礎を築き、子孫たちがそれを進展させていったということができよう。小論では現地語資料を中心に彼の生涯をたどっていき、彼がなぜカーブルを奪取してアフガニスタンの支配者にまでなり得たのかを明らかにしていくことにしたい。

キーワード：

アフガニスタン、カーブル、ドースト・モハンマド・ハーン、
モハンマドザーイー朝

ドースト・モハンマド・ハーン（在位；1826-1839、1843-1863）はモハンマドザーイー朝（1826-1973、別名、バーラクザーイー朝）の創始者であるが、その生涯についてはいくつかの不明な点が残されており、明らかにされなければならない問題は少なくない。そこで、ここでは彼の生涯をたどっていき、

彼についての問題点を明らかにしていくことにしたい。

ドースト・モハンマド・ハーンは、1792 年 12 月にカンダハールで生まれた。彼の父はドッラーニー朝の武将で、アフガン人の中でもバーラクザイー系モハンマドザイー部の族長であったパーヤンデ・ハーンであった。しかし、彼の父は 1799 年に主君であるドッラーニー朝のザマーン・シャー（在位；1793-1800）によって殺害された。パーヤンデ・ハーンが暗殺されたことから、長男であるファトフ・ハーンなど彼の息子たち（[表 1] 参照）はザマーン・シャーに報復を行い、これを廃してその異母兄に当たるシャー・マフムード（在位；1800-1803、1809-1818）を擁立することに貢献した。

父の殺害当時、幼児であったドースト・モハンマド・ハーンはジャワーンシール系キズイルバーシュ出身の母によって育てられることになった。彼の母は身分的にはさほど高くはなかったが、パーヤンデ・ハーンの実妻だったといわれている。後に従兄のアブドゥル・マジード・ハーンが母と強引に婚姻した際には、彼はシャー・マフムードの宰相となっていた長兄のファトフ・ハーンの庇護下に入るようになった。

ドースト・モハンマド・ハーンは、最初はファトフ・ハーンの前哨役として、次いでクーヘスターンの太守として抬頭していった。1817 年、兄に同行したヘラート遠征では、同地の太守でシャー・マフムードの同母弟で兄に反抗していたフィールーズ・アッディーン王子が捕えられた後、その財産没収のために派遣された。しかし、ドースト・モハンマド・ハーンはヘラートで多くの無実の者やハーレムの者たちを殺害した。このため、反抗していたとはいっても、フィールーズ・アッディーン王子に悪意は持っていなかったとされるファトフ・ハーンとシャー・マフムードの報復を恐れ、ドースト・モハンマド・ハーンはカシミールに逃走した。

ファトフ・ハーンはヘラートを占領した後、長年抗争の続いていたイランのカージャール朝攻撃の準備を進めていた。しかし、彼のヘラートでの成功に強い危機感を持ったシャー・マフムードの子のカームラーン王子は直ちにカンダハールからヘラートに向かった。両者はヘラートで 3 ヶ月間共に過ご

したが、カームラン王子は不安感をぬぐい去ることができず、ついに王子はファトフ・ハーンを盲刑に処した。そのため、ドッラーニー朝下ですでに地方の太守などの要職を占めていたファトフ・ハーンの兄弟たちは長兄に対する報復を誓うこととなった。これによって、いわゆる「アフガン内乱」(1818-1826)が勃発することになったのである。

長兄の不幸を知ったドースト・モハンマド・ハーンは2人の異母兄弟、ヤール・モハンマド・ハーンとピール・モハンマド・ハーン、とともに駐留していたカシミールからカーブルに向かい、ほとんど無抵抗のまま1819年にカーブルに入城した。シャー・マフムードとカームラン王子はカーブル奪回を決意してヘラートを出陣し、その際に盲目となったファトフ・ハーンを同行させたが、その道中でカームラン王子は彼を殺害した。ドースト・モハンマド・ハーンはシャー・マフムードとカームラン王子の進軍阻止を図って出陣したため、彼らは戦うことなくヘラートに退却した。これによって、ドッラーニー朝はカーブルを失うことになり、その後はヘラートに拠ることになった。

やがてカーブルはドースト・モハンマド・ハーンの異母兄であるモハンマド・アズィーム・ハーンの統治下に入り、ドースト・モハンマド・ハーンはガズニーの太守となった。モハンマド・アズィーム・ハーンが1822年に没すると、彼の子のハビーブッラー・ハーンがカーブルを支配下に置いたが、後にドースト・モハンマド・ハーンはこれを破ってカーブルを占領した。また、カーブルのキズィルバシュの支援を得て、異母弟であるソルターン・モハンマド・ハーンの進攻をも退けた。こうして、ドースト・モハンマド・ハーンは1826年にカーブルを完全にその勢力下に置いたのである。

ドースト・モハンマド・ハーンはカーブルを支配下に置くと、自らの勢力をアフガニスタン全土に拡大し始めた。彼はガズニーを占領し、ドッラーニー朝の元君主で英国の庇護下にあったシャー・ショジャー・アルモルク(ザマーン・シャーの同母弟、在位; 1803-1809、1839-42)をカンダハールで破った。その一方で、かつて支配下に置いていたペシャーワルの回復は1834

年と 1837 年の 2 回にわたって失敗した。彼は 1834 年にアミールの称号を称し、シンド地方のシーク教徒に対してジハードを宣言した。このように、周辺各地への遠征事業を行っていた。

1838 年 10 月にインド総督オークランドがシムラ宣言を発表し、第一次アフガン戦争が勃発した。翌 1839 年 8 月、アフガニスタン領内に侵攻した英国軍の攻撃によって、ドースト・モハンマド・ハーンはカーブルを追われ、北方に逃れてブハラの君主ナスルッラーを頼って亡命した。カーブルでは、彼に代わって、シャー・ショジャー・アルモルクが統治者として復活した。

思いがけずもナスルッラーの許で幽閉同然の苛酷な扱いを受けていたドースト・モハンマド・ハーンは、1840 年 8 月にブハラを脱出してアフガニスタンに帰還して英国軍と戦うことを決意した。こうして同年 11 月に両軍は衝突し、ドースト・モハンマド・ハーン軍は比較的優位に戦闘を続けたが、なぜか彼は突然英国側の勧告を受け入れてその庇護下に入り、インドに亡命することになった。彼が突然翻意してなぜインド亡命に同意したのか、その理由は不明である。

しかし、1842 年 1 月、アフガニスタン駐屯の英国軍は各地での反乱によって敗走し、残されたシャー・ショジャー・アルモルクも同年 4 月には殺害されてドッラーニー朝は事実上崩壊し、カーブルは無政府状態に陥った。そうした状況の中で、ドースト・モハンマド・ハーンはアフガニスタンへの帰還を決意し、英国の許可を得て翌 1843 年にカーブルに帰還して、再びアミールとして統治を始めることとなったのである。

彼の第二期の統治時代に、ドースト・モハンマド・ハーンはペシャーワルとカシミールを除く全アフガニスタンを直接支配下に入れることになった。彼はバーミヤーンとハザーラジャートを 1849 年に征服し、子のモハンマド・アクラム・ハーンをその太守に任命した。さらに、1854 年にトルキスタンへ遠征し、バルフ、シバルガーンを征服して息子のモハンマド・アフザル・ハーンをそれらの太守に指名した。

ドースト・モハンマド・ハーンは異母弟のコハンデル・ハーンが支配する

カンダハールとカームラーン王子以降支配者が次々と代わっていったヘラートの 2 勢力と対立関係を続けていた。しかし、1855 年にコハンデル・ハーンが没した後に生じた混乱に乗じて、彼はカンダハールまで支配下に入れることになった。こうして最後まで残されたのはヘラートであったが、1863 年 5 月、ドースト・モハンマド・ハーンはついにこれを征服し、現在のアフガニスタンのほぼ全土を支配下に入れることになったのである。そして、その 2 週間後、彼は 6 月 9 日にヘラートで没した。

ドースト・モハンマド・ハーンは今日のアフガニスタンに当たる地域を支配下に入れて単一の中央政権を築き上げた最初の人物である。そのため、彼が近代アフガニスタン国家の基礎を築き、その子孫たちがそれを進展させていったということができよう。しかし、彼がなぜカーブルを奪取してアフガニスタンの支配者にまでなり得たのかについては不明な点が多い。

[表 1] から明らかな通り、彼は 20 人兄弟中の 11 男に過ぎず、権力闘争の際に絶対的な同盟者となるべき同母兄弟としてはアミール・モハンマド・ハーンしかいなかったが、この弟も 1734/5 年には夭折していた。ホータク系アフガン人の母を同じくするポルデル、シールデル、コハンデル、ラフムデル、メフルデルの各ハーンたち（いわゆる「デル兄弟」）が共同でカンダハールを中心に勢力を誇り、ドースト・モハンマド・ハーンと対抗したのとは好対照である。

[表 1] ドースト・モハンマド・ハーンの兄弟たち				
氏名	生年	没年時の年齢	支配期間	没年
Vazir Fath Khan	1778 年 1/2 月	42 歳		1818 年
Navab Asad Khan	1778 年 4/5 月			
Na'eb Teimur Qoli Khan	1780/1 年	43 歳		1822 年 9/10 月
Navab 'Abd al-Jabbal Khan	1782/3 年	73 歳		1853/4 年
Sardar Mohammad 'Azim Khan	1785/6 年	38 歳	4 年	1822 年 9/10 月
Sardar Pordel Khan	1785/6 年	45 歳	3 年	1830 年 5 月
Navab 'Abd al-Samad Khan	1785/6 年	44 歳		1828/9 年
Sardar 'Ata Mohammad Khan	1785/6 年	39 歳	1 年数ヶ月	1823/4 年
Sardar Shirdel Khan	1786/7 年	41 歳	8 年	1826 年 8 月 29 日
Sardar Yar Mohammad Khan	1790/1 年	39 歳	4 年	1828/9 年
Amir Dost Mohammad Khan	1792 年 12 月 22 日	72 歳 7 ヶ月 22 日	14 年、21 年	1863 年 6 月 9 日
Sardar Kohandel Khan	1793/4 年	63 歳	26 年	1855 年 8 月 21 日
Sardar Amir Mohammad Khan	1794/5 年	42 歳		1834/5 年
Sardar Torebaz Khan	1795 年 8/9 月			
Sardar Soltan Mohammad Khan	1795 年 9/10 月	68 歳	5 年	1861 年 10 月 23 日
Sardar Rahmdel Khan	1796/7 年	64 歳	2 ヶ月	1859 年 2/3 月
Sardar Sa'id Mohammad Khan	1797/8 年	65 歳		1860/1 年
Sardar Mehrdel Khan	1797 年 6/7 月	59 歳		1855 年 3 月 17 日
Sardar Jam'e Khan	1800 年 3/4 月	74 歳		1871/2 年
Sardar Pir Mohammad Khan	1800 年 4/5 月	64 歳		1871 年 5/6 月

出典： Seraj al-Tawarikh, vol.2, pp.3-4 による

このような悪条件の中でドースト・モハンマド・ハーンが全アフガニスタンの支配者になり得た理由については、まだまだ史料の分析を進めなければならない。しかし、彼個人の軍事的才能に加えて、現時点ではかなり幸運に左右された部分があったとみることは不可能ではないだろう。

彼はアフガニスタン社会の一部分を他の部分に対抗させることによって、これを統治しようとした。従属しない部族は力で抑えつけた。一般的にドースト・モハンマド・ハーンは敵対者に対してもそれほど厳しい扱いはしなかったといわれているが、モハンマドザーイー部の主要な対抗相手であるギルザーイー部の族長たちには特に厳しく対応していた。彼は、母がシーア派であったことからか、シーア派のキズィルバーシュやハザーラ人と同盟することがしばしばあり、彼らを武官や文官として遇した。婚姻も彼が効果的に利用した政治的手段であり、彼が没した時には 16 人の妻がいたという。

[表 2] で見る通り、ドースト・モハンマド・ハーンには 27 人の王子がいた。その中で、彼の存命中に皇太子に指名されていたのは 6 男のシール・アリー・ハーン（在位；1863-1865、1868-1879）であった。しかし、兄弟間の対立緊張関係は続き、その他にも長男のモハンマド・アフザル・ハーン（在位；1866-1867）と 5 男のモハンマド・アアザム・ハーン（在位；1867-1868）もアミールの地位に就いた。ちなみに、近代アフガニスタンの原型を築き上げたともされるアブドゥル・ラフマーン・ハーン（在位；1880-1901）はモハンマド・アフザル・ハーンの子に当たる。

[表 2] ドースト・モハンマド・ハーンの子たち					
順番	氏名	生年	年齢	没年	埋葬地
1	Amir Mohammad Afzal Khan	1814/5 年	54 歳	1867/8 年	カーブル Qal'e-ye Hoshang Khan
2	Vazir Mohammad Akbar Khan	1816/7 年	31 歳	1846/7 年	マーザリ・シャリーフ、トルキスタン
3	Sardar Mohammad Akram Khan	1817/8 年	33 歳	1849/50 年	マーザリ・シャリーフ、トルキスタン
4	Sardar Gholam Heidar Khan	1819/20 年	39 歳	1858 年 7 月 3 日	Mazar-e 'Asheqan va 'Arefan
5	Amir Mohammad A'zam Khan	1820/1 年	50 歳	1869/70 年	Mazar-e Bayazid-e Bastami
6	Amir Shir 'Ali Khan	1822/3 年	58 歳	1879/80 年	マーザリ・シャリーフ、トルキスタン
7	Sardar Vali Mohammad Khan	1825/6 年	72 歳	1895/6 年	Mazar-e Shah Mohammad Ghus Lahur
8	Sardar Mohammad Amin Khan	1826/7 年	40 歳	1865/6 年	Kharqe-ye Sharife-ye Qandahar
9	Sardar Mohammad Sharif Khan	1827/8 年	65 歳	1888/9 年	バグダード
10	Sardar Ahmad Khan	1829/30 年	70 歳	1897/8 年	Mazar-e Sheikh Habib Peshawar
11	Sardar Mohammad Zaman Khan	1831/2 年	42 歳	1872/3 年	Mazar-e Shah Mohammad Ghus Lahur
12	Sardar Mohammad Aslam Khan	1832/3 年	39 歳	1870/1 年	Bagh-e Shah Kabul
13	Sardar Mohammad Hasan Khan	1833/4 年	47 歳	1879/80 年	Bagh-e Shah Kabul
14	Sardar Mohammad Karim Khan	1833/4 年	64 歳	1895/6 年	Mazar-e Bari Emam Ravalpindi
15	Sardar Mohammad Hosein Khan	1838/9 年	33 歳	1870/1 年	Bagh-e Shah Kabul
16	Sardar Feiz Mohammad Khan	1839/40 年	29 歳	1867/8 年	Mazar-e Seyyed Mahdi Kabul
17	Sardar Mohammad 'Omar Khan	1840/1 年	66 歳	1904/5 年	Mazar-e 'Asheqan va 'Arefan Kabul
18	Sardar Seifollah Khan	1843/4 年	23 歳	1865/6 年	Mazar-e 'Asheqan va 'Arefan Kabul
19	Sardar Mohammad Yusof Khan	1845 年			当時まだ存命
20	Sardar Mohammad Qasem Khan	1846/7 年	28 歳	1874/5 年	Mazar-e 'Asheqan va 'Arefan
21	Sardar Mohammad Hashem Khan	1846/7 年	37 歳	1882/3 年	Mazar-e 'Asheqan va 'Arefan
22	Sardar Habibollah Khan	1851/2 年	47 歳	1897/8 年	Sarhand-e Sharif
23	Sardar Mohammad Rahim Khan	1853/4 年	10 歳	1863/4 年	Mazar-e 'Asheqan va 'Arefan
24	Sardar Nik Mohammad Khan	1854/5 年	29 歳	1882/3 年	Mazar-e 'Asheqan va 'Arefan
25	Sardar Mohammad Sadeq Khan	1854/5 年	18 歳	1872/3 年	Mazar-e Baba Kadani Kabul
26	Sardar Mohammad Sh'ib Khan	1855/6 年	30 歳	1884/5 年	Mazar-e Mehtar Lamak Laqman
27	Sardar Mohammad 'Azim Khan	1856/7 年			当時まだ存命

出典： Seraj al-Tawarikh, vol. 2, p. .80 による

このように、ドースト・モハンマド・ハーン自身の世代も彼の子たちの世代も、兄弟間の対立緊張関係は広く見られた。こうした同族内での対立緊張関係がモハンマドザーイー朝初期の特徴の一つともいうことができよう。しかし、いずれの世代においても、強力な背景を持った者が必ずしも勝利を収めたわけではなかった。そうした点で、この王朝の初期においてはさまざまな偶然が運命を左右していたということができよう。

[参考文献]

Molla Feiz Mohammad Kateb Hazare, *Seraj al-Tawarikh*, 3 vols., Tehran, 1993-5.

Adamec, L. W., *Who's Who of Afghanistan*, Graz, 1975.

Lal, M., *Life of the Amir, Dost Mohammad Khan of Kabul*, 2 vols., London, 1846, repr., Karachi, 1978.

Noelle, C., *State and Tribe in Nineteenth-Century Afghanistan---The Reign of Amir Dost Mohammad Khan (1826-1863)*, Surrey, 1997.

小牧昌平「最近のアフガニスタン近代史研究動向」(『上智アジア学』16号、1998年)。